

2010年5月25日

## 第2回（2009年度）「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究奨励賞選考委員会

### 選考経過と選考結果

「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」の対象は、卒業生を含む若手の昭和女子大学関係者が著した著作（博士論文を含む）である。第2回奨励賞の選考対象は、自薦・他薦を含む28本の単行本と論文であった。

女性文化研究奨励賞選考委員会は、3月3日、3月11日、4月13日の3回にわたり学内選考委員会を開催し、まず第一次選考の候補作を4点に絞った。博士論文を含め、社会的意義と質の高い候補作が並んだが、討議の結果、斎藤悦子氏の著作『CSRとヒューマン・ライツ—ジェンダー、ワーク・ライフ・バランス、障害者雇用の企業文化的考察』（白桃書房 2009年）が最終候補として選考され、4月13日の最終選考委員会において決定された。

斎藤悦子氏は、1992年に明治大学大学院経営学研究科博士課程前期を修了後、昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程で学ばれた。当時本学女性文化研究所所員教授であった伊藤セツ現昭和女子大学名誉教授のご指導のもとで、博士論文を書き上げられ、1997年3月に博士号を取得された。同年ただちに岐阜経済大学経済学部講師に就任なさり、助教を経て、現在同大学教授である。

受賞作は、企業の社会的責任すなわちCSR（corporate social responsibility）の本質を企業文化的に解釈することを試みている。斎藤氏の修士論文以来のテーマであった企業文化論を基盤に、博士論文で深めたジェンダーリングの視点を活用し、近年のジェンダー平等やワーク・ライフ・バランスに配慮するマネジメントが、企業のイメージアップや人材確保、社会的責任投資すなわちSRI（socially responsible investment）やCSRに結びつけられようとしている新たな状況を、単なる表層の対応に過ぎぬものではなく、企業文化の深層部分に根付くべきヒューマン・ライツの視点から問題提起している。そのため、日本の企業の雇用管理体制におけるヒューマン・ライツへの配慮を、ジェンダー平等、ワーク・ライフ・バランス、障害者雇用の取組というCSRの三つの実践課題として捉え、企業文化の根底から生まれるCSRのあり方を示し、今後の日本企業のCSRへの取り組みに対して提言をなそうとする意欲作である。

本書はしっかりした構成をもち、論証のために4つの独自の調査を用いている。まず東京都世田谷女性センター「らぶらす」の援助を受けて行った世田谷区における生活時間調査、次に科学研究補助金を受けて行った企業アンケート調査、岐阜経済大学共同研究補助金を受けた企業インタビュー調査、最後に日本企業のCSR報告書調査である。本研究には国際的視点も導入されており、斎藤氏が2006年に留学したイギリスThe University of Nottingham, Business SchoolのICCSR（International Centre for Corporate Social

Responsibility) における CSR 研究の成果も反映されている。

齋藤氏自身が今後の研究の展望も記しておられるが、受賞を契機として、一層研さんを積み、今後さらなるご活躍をなされるよう期待している。